

(記念号に寄せて)

浦和大学こども学部学校教育学科開設への期待と課題

— 「混沌」から私らしさを打ち立てられる教師の養成—

浦和大学・浦和大学短期大学部 学長
大久保 秀子

要約

2017年4月、浦和大学こども学部に新たに「学校教育学科」が開設された。2007年に設立されたこども学部は、こどもを一人の人間として総合的に把握できるこども理解の能力形成をめざしている。こども自身が唯一無二の自分らしさに気づき尊重できるような教員や保育者の養成において、学生自身がまず自己理解を深めることが必要である。この基本方針を新学科において踏襲し、さらに発展させている。教師として身に付けるべき教育技術と並んで、深い人間理解につながる総合性のある教育課程編成としており、教員養成の新たな方向性をめざしている。同学科が今後、さまざまな課題を克服しながら、意義ある教員養成課程として実を結んでいくことを期待している。

キーワード 学校教育学科 教員養成課程 自己理解 こども理解

目次

はじめに

1. 本学改組の流れと「学校教育学科」設置への展開
 - (1) 本学改組の足跡
 - (2) こども学部こども学科設立から学校教育学科設立への展開
2. こども学部10年の研究教育の特色
 - (1) こども学部の「こ」はなぜ「子」ではないか
 - (2) こども学部の教育理念
 - (3) 混沌から「私らしさ」を確立できる力の形成
 - (4) 地域社会と連携した教育の展開
 - (5) 「家族支援の先進国カナダ」・ライアソン大学との提携
3. こども学部から学校教育学科設置への接合性
 - (1) 「こども学部学校教育学科」である矜持
 - (2) 「こども総合」授業科目群の再編と必修科目配置における学科の差別化
 - (3) 「こども理解と観察」の必修化
4. 学校教育学科の特色
 - (1) 社会性を育てる学科教育
 - (2) 「生きる力」の形成に寄与する「家庭科」重視
5. 課題と展望
 - (1) 「英語科指導」への取組
 - (2) 地域社会の課題への取組
 - (3) 教員採用試験への対応と意義ある学生生活の両立

むすびに

はじめに

2017（平成29）年4月、浦和大学こども学部に「学校教育学科」が開設された。

こども学部設立からの10年、学部構想において先送りした小学校教諭免許の取得課程の設置について、本格的な構想段階に入って4年、学科開設に至ることができ、まずは安堵するとともに、厳しい世界の扉を開いたことへの緊張感を感じている。

この10年は大学改革の波が怒涛のごとく大学を覆った10年でもあり、新学科設置では、これまで経験してきた学部や学科の設置とは異質な課題にもぶつかった。しかし、不思議な巡りあわせに恵まれ、幾重にも絡む糸がほぐれる経験もまた、これまでになく多かったことは幸いだった。

本稿は、浦和短期大学設立から30年、その約3分の2以上の年数、その時々と与えられた責務を果たすべく携わった者として、本学に関する理解を深めていただくとともに、こども学部学校教育学科開設の意義を述べるものである。

1. 本学改組の流れと「学校教育学科」設置への展開

(1) 本学改組の足跡

校訓「実学に勤め徳を養う」を体現して、英語科、経営科という、高度成長期に求められた実学を身に付けた人間を世に送り出す教育に始まる「浦和短期大学」の設立から10年、自他ともに認める経済大国となった日本において、学園創設者であられる故九里總一郎理事長は心の渇きを問題視された。浦和短期大学として「福祉科」設置による福祉教育ならびに、社会福祉法人浦和福祉会の設立による福祉実践の開始によって応える方針を立てられ、1997（平成7）年、九里秀一郎現総合福祉学部教授が「福祉科」開設及び社会福祉法人の設立という、今日の原型となる形を創設された。

次に2003（平成15）年、社会福祉に求められる総合性と専門性の高度化に応えるべく、高齢者福祉、障がい者福祉を主軸とし、後に児童分野の学部学科を追加する構想をもって、「短期大学福祉科社会福祉専攻」を4年制の「浦和大学総合福祉学部」へと改組した。

2007（平成19）年の「こども学部こども学科」設置では、4年制大学らしい特色ある保育者養成を行う学部編成を行った。児童福祉事業では保育士の配置基準が定められており、保育士資格は児童福祉事業の幅広い業務に従事するいわば基礎資格である。

こども学部設置によって保育士及び幼稚園教諭の養成に着手し、さらに総合福祉学部「コース制」を導入したことにより、こどもから高齢者、障がい者等々、多様な人々への多角的な支援能力の修得を目的とする二つの学部、短期大学部における介護福祉士養成と合わせて、福祉・保育・介護系の大学・短期大学の形を整えるに至った。

この間、学部学科開設に際して、校訓に基づく教育を福祉・保育・介護、そして学校教育のいずれについても実践しようとする考え方を示そうと考え、「豊かな人間性に裏打ちされた高い専門性を修得すること」という表現を共通して用いてきた。

(2) こども学部こども学科設立から学校教育学科設立への展開

こども学部こども学科の設立に際しては、敢えて小学校教諭免許の取得を見送り、地域社会との連携による教育ならびにカナダの家族支援についての学修を特色とする設置構想とした。

小学校教諭の免許取得を見送った理由はいくつかあるが、最大の理由は、3つの免許・資格の取得を可能とした場合、学生の選択肢は広がるものの、免許・資格の取得の負担の重さが幅広い教養の修得に困難をもたらしかねない懸念があったことである。保育士・幼稚園教諭の取得に向けた丁寧な指導をしていくことを目標に定め、高等学校や高校生にもそのように説明してきた。

一方では、こども学部の発展過程で設置可能なタイミングを見定めることを常に念頭に置いていた。こども学部長として、小学校教諭の教職課程を設置することについて学部会議での賛成を得て情報収集を開始し、設置準備に入った。

現在、文部科学省は、「教員養成を目的とする」学部・学科にのみ教職課程設置を認める方針であり、教育職員免許法及び同施行細則に定められた授業科目を、教育実習を除いて卒業必修とすることを求めている。したがって、教育学部または教育学科への設置が合目的な設置であることはいうまでもない。

それでもなお「こども学部」に配置することに、本学として小学校教諭の養成をする意味が大きいと見え、教育課程編成の考え方、教員配置に十分に反映させていった。大学に裁量が許される範囲で、最大限、こども学部教育との接合性を担保し、ひいては校訓を体現する教員養成を行う趣旨のもとでの学科設置をめざしたものである。

2. こども学部10年の研究教育の特色

(1) こども学部の「こ」はなぜ「子」ではないか

こども学部の教育理念、特色をここで改めて確認するとともに、何を積み上げ、どこに向かえばよいのか、考える手がかりを得たい。

まず「こども学部」を「子」としていない意味をしばしば尋ねられる。「子」は大人や親との対語として用いられ、一人前ではない、小さいといった意味を有している。また、古くは男子に付けられ、男子の意味にも用いられた。これを避けた。

加えて「こ」には、「己」すなわち「おのれ」の意味もある。「固有」の「こ」、「個々」の「こ」の意味もある。こども学部の設置構想では「私らしさを確立するのがこども期」であり「私らしさの獲得がこどもの権利である」という考え方を提示してきた。そこには、学生自身が「私らしさを自ら確立する」ことを目指して学び、その学生生活への支援を行うという趣旨を含んでいる。

(2) こども学部の教育理念

こども学部の教育理念を示す「こどもと育つ」は、こども学部設立の最初の学部会議で話

し合い、ある教授からの提案に皆が賛同して決まったものである。「Growing Together」はカナダの家族支援でも用いられる大事なコンセプトである。「こどもと共に育つ」はよく見かける表現である。絶対に「共に」ではいけない、というわけでもないが、「共に」とすることで「私」あるいは「保育者」と「こども」が「共に」の対象であるとの枠を示すことになりかねず、こどもとのより自由な関係性、先入観にとらわれない保育者像を示せる「こどもと育つ」を重視している。

(3) 混沌から「私らしさ」を確立できる力の形成

こども学部への設置申請書には学生自らが「自分らしさの確立」を「こどもの人権」であると捉える考え方を示し、人生を歩む根幹を各自の内面に打ち立てる学部教育をしたい趣旨を記した。「自分らしさ」「私らしさ」を確立させていくことは、大学時代に学生が向き合う課題でもある。

「親子のひろば『ぼっけ』」は「ポケット」に広がる宇宙で、そこに参加するすべての人が何かを得る場である。「何が出てくるかわからない、でもワクワクする、のぞいてみよう、きっと何か出てくるよ。」と語りかける、「ぼっけのうた」(源井和仁作詞 出口雅生作曲)の歌詞、「のぞいてみよう、何が見えるかな」は、その本質を見事に示している。

「何が見えるか」「何が起きるか」わからない、「混沌」をそれとして体感し、受けとめて立ち上がる勇氣は、対人援助に限らず、全ての人々に必要な「生きる力」であると言えよう。私たちは、とかく混沌や不安定を回避したいという誘惑にかられるが、混沌とした海に浮き沈みしながら国づくりが始まる神話の世界や、人間の生命もまた混沌から始まることを考えれば、無から「新しく出会う力」は「人の心に信頼を育む力」であり、生きる心棒をつくる力であるとも言えるだろう。

(4) 地域社会と連携した教育の展開

こども学部における教育の最大の特徴は、大学を地域社会の一つの社会資源とし、学生生活が、地域社会との連携、交流の中で幅広い体験のもとで展開されるようにしようと考えたことである。「こどもコミュニティセンター」は学内外の連結の役割を担い、「親子のひろば『ぼっけ』」は学生教育への貢献と、訪れる親子を通じて地域社会への貢献とを同時に実現している。

「こどもコミュニティセンター」の設置は、大学と地域とをつなぐ拠点を学内に設立する考え方に基づいており、保育実習や幼稚園教育実習もまた、「地域との連携において」実習を展開するという考え方を基礎において支援にあたることをめざしたものである。

定期的に親子が学内に出入りする環境が、学生にとって「見知らぬ人」との関わりの機会を増大させ、社会性の醸成にも一定の役割を果たしてきた。

このセンターはこども学部の教育を生み出す源として、十分に存在意義を果たしてきた。本稿では詳細を省くが、今後、同センターが学生、教職員、地域社会にどのような影響を与

え、本学の教育にいかなる波及効果をもたらしたか、検証し報告する必要がある。

(5) 「家族支援の先進国カナダ」・ライアソン大学との提携

保育士のイメージといえば、「こどもと遊ぶ」「こどもの世話をする」とされることが象徴しているように、こどもと楽しく過ごせる仕事、と思われがちである。しかし、こども学部設置の際、強く意識したことは、こどもとの関係だけではなく、その背後にある保護者、地域社会との関係において保育をとらえるということであった。

家族支援の先進国と言われるカナダで、4年制の幼児教育学部を最初に設置したライアソン大学ソーシャルサービス学部のこども学科（Department of Early Childhood Studies）との学術提携を実現させ、こども学部の教育課程編成においても、同学科のカリキュラムを参考にしていた。

多文化主義を自主憲法に謳うカナダでは、語学の壁や文化の壁を取り払うことを含む家族支援プログラムが充実している。他国からの移民家族の支援、先住民への支援、性的マイノリティへの支援など多岐にわたる。2016年度に実施した「浦和大学国際セミナー」で講演したアリ教授は、差別の存在を指摘した。言い換えれば、差別の存在と、それゆえの制度整備への積極的努力の重要性を指摘したのである。

10年間、ほぼ毎年のスタディツアーの実施と4年ごとのライアソン大学からの教員の招聘などを積み重ねた結果、現在ではライアソン大学の「インターナショナルインターンシップ」の海外実習先として浦和大学が指定され、相互交流が深められている。今後、この成果を総括し、学術提携の成果を高めることは重要な課題である。

3. こども学部から学校教育学科設置への接合性

(1) 「こども学部学校教育学科」である矜持

これまで述べたように、こども学部は「こども＝一人の人間」とする「こども観」を提示し、「自分らしさ」を確立することが「こども期における人権」ととらえており、いわば人間が生涯を生き抜く基礎づくりに深く関与する小学校教師、とりわけ現代の小学校教師には、多角的な児童理解、こどもへの関与の多様な方法、こどもの家族や地域における生活の把握とそれに基づく対応などが求められよう。そこには、個々の児童に関する全人的把握や、自らの人格的陶冶、「こどもと育つ」態度を通じて教育実践に努める教師像が浮かび上がる。

こうした教師観に立つと、本学が「こども学部」において培ってきた教育及び研究の成果を、新設学科において世に問うという、思い切った学科設立を行うべきであるというのが本学の選択である。

これが、こども学部学校教育学科を設置した矜持である。

とりもなおさず、それはこども学部の教育と学校教育学科との、より良き接合を実現していくため、こども学部及びこども学科の本体をどのように変革するか、という積極的な課題を突きつけられたということも意味している。本体の変革は、本体をより良きものとするの

でなければならない。改組によって、両学科の差別化とそれぞれの体力強化を図り、学部の発展に寄与することを目指すということである。

(2) 「こども総合」授業科目群の再編と必修科目配置における学科の差別化

こども学部設置の際、「こども専門科目」の一部に「こども総合」の科目区分を設定した。いわゆる「教養科目」とも「専門科目」とも異なる、「こども学部」の4年間の学修にとって機軸となる科目区分である。学科の独自科目とは言えない授業科目で、かつ、こどもに関する総合的理解を深め、専門性を高めることに役立つ性格を有するのが、この「こども総合」であり、本学こども学部の屋台骨となる科目区分である。

学科新設に伴い、こども学部の両学科に共通する「こども総合」を「生命」「自然」「人権」「多文化」「表現」「創造」をキーワードとして見直し、「こどもの総合的理解」「こどもの表現と文化」の二つの科目群として再編成した。加えて、学科別に学修の優先度を考慮し、必修科目の設定を行ったことにより、「こども総合」はさらにユニークな本学こども学部の柱となった。

こども学部設立に際しては、「人間の本質に迫る文化・芸術教育」の授業科目の充実をめざした。マニュアル通りの技法にとらわれず、「表現は人間の本質に深く切り込む行為」との認識に立ち、定められた完成品を仕上げるという段階の上り方ではなく、次の階段をどんなふうに作ろうかを、自由に考え、自由に泳ぎまわる、いわば自らを解放することが、こども理解＝人間理解を深めるとの考え方に立っている。こどもの創造的世界を引き出し、その世界を共有できる保育者・教育者を養成することを目指したこども学部の教育の特色は、明確に新学科へと接合されている。

(3) 「こども理解と観察」の必修化

こども学部では、開設当初から地域の親子の協力を得て1年生の「こども理解と観察」の授業を必修としている。上述した「こども総合」区分の授業科目で、おそらく全国に例のない授業である。

方法は20人以内のクラスに対し、1組の乳児親子を「赤ちゃん先生」になってもらい、1年間に5回程度、授業に参加していただくという授業である。こども学部の学生にとって最も印象に残る授業に選ばれている。これは、保育者を志す者として、こどもの発達の様子、親子の関係について、1年間にわたって学ぶことにより、「人生の始まり」に関わらせていただく授業である。保育者に関わらず、人間としての共感性を高め、命を肌で感じるといふ貴重な経験となっている。単に「かわいい」という感情だけではなく、発達への関与観察を行うことを目指している。

「学校教育学科」においても、これを必修とした。教師にとって、こどもの発達を理解し、人間理解の原点を学ぶ機会を持つことが重要である。児童期のこどもに関わるのに際して、そのこどもの時間軸を広げて想像することも可能となり、こども理解に立脚した教育者を育

てるため、不可欠な授業科目である。

4. 学校教育学科の特色

こども学部を基盤とする学校教育学科設置に至った経緯等については、以上に述べたとおりである。それをふまえて、学校教育学科の特色を2点に絞って述べる。新学科の詳細かつ総合的記述は、山口論稿に譲る。

(1) 社会性を育てる学科教育

こども学部“Faculty of Child Studies”の略称をロゴとしてデザインした「CSマーク」がある。「C」は“Communication”, “Community”, “Collaboration”を意味し、「S」は“Student”, “Support”に加え“Sociality”すなわち社会性の意味が込められている。

学校教育学科は入学定員30人、収容定員120人ときわめて小規模で、顔の見える教育をめざしている。そして基準教員よりも1人多い9人の専任教員を擁している。

小規模が逆機能するリスクも考慮しなければならないが、本学が、これまで実践してきた教育の特色は学生と教員の距離の近さである。人間関係の構築が不得手な学生が増えていることは全国的な傾向であり、教育者を目指す学生にとって、児童との人間関係はもちろんのこと、保護者、同僚や先輩後輩、近隣住民といった、多様な「大人」との人間関係を形成できる能力は必須である。社会性という言葉を借りるならば、学生生活を小規模な所属集団で送ることにより社会性を育てることをめざすものである。

さらに、初対面の多様な人との人間関係を形成できる能力を培う機会を「教育インターンシップ」においても提供する。「教育インターンシップ」には学内の学修だけでは成し得ない効果が期待される。

加えて、常に地域の親子や高齢者、障がい者が学内を歩いている環境の中で、人間の多様さを自然に受け入れていく感性と社会性を獲得できる機会に恵まれているのは、本学の大きな特色であり、他大学とは異なる学修環境を提供できる強みである。

(2) 「生きる力」の形成に寄与する「家庭科」重視

短期大学福祉科設置の際、介護福祉士の教育課程には「家政学実習」を開設しなくてはならなかった。福祉科開設に助言をいただいた、故一番ヶ瀬康子日本女子大学名誉教授が介護と家政学の関わりを重視されたこともあり、充実した家政実習室（被服・住居）と調理実習室を整えられている。

保育士養成を開始した時もこれらの設備を十分に活用し、今回の小学校の教員養成課程設置でも、「教科に関する科目」の一つに、家庭科を選択した。

それは活用できる設備を十分に活用し、家庭科を「教える」以前に、どうしても軽視されがちな「家庭科」をきちんと学び直し、学生自らが生活力を形成する必要があると考えたためである。

こども学部が「家庭・家族支援」の能力形成を重視してスタートしたことも、こどもを育てるために必要な生活力形成を意図したことに関連しており、学部としての一貫性ある選択とすることができる。

小学校教師をめざす学生教育においては、衣食住及び家庭経営に関わる生活力と生活管理能力をしっかりと形成するだけでなく、日々の暮らしに直結する食料自給率の課題から国際関係や農業問題を認識でき、貧困による食の妨げが教育現場に与えている現実的な課題を正しく受け止め解決策を考える力を高めることにもつながる。そうした総合的な能力形成を期待しているのである。折しも日本学術会議は教員養成における家庭科教育の重要性と改善課題を提言しており、時機に叶った教科選択であったと考えている。

5. 課題と展望

(1) 「英語科指導」への取組

教職課程認定申請時の「外国語活動指導法」は、小学校における英語の教科必修化を受け、平成31年度開始の新課程では、「初等英語」及び「初等英語科指導法」の授業科目が必修化された。さいたま市においては、既に小学校での英語の必修化に取り組んでおり、教育委員会及び地域からの期待も高い。

英語教育については、九里秀一郎UHCプレジデントの協力を得て、出口雅生学科長がハワイ研修を含む、4年間にわたる教育計画を立てており、既に、ネイティブスピーカーによる課外授業を開始している。九里学園の有するUHCは、創設者の九里總一郎先生が先見の明を持って設立した教育施設で、短期大学英語科では全学生が海外研修を行っていた。『教育に愛の灯をともして』というご高著の書名からも教育への熱意がわかるところだが、本格的な教員養成に取り組む学科の学生が、ハワイで学ぶことには特別の意味がある。今後、本学独自のプログラムとしての発展を切に願うものである。

(2) 地域社会の課題への取組

さいたま市では『さいたま市総合振興計画』において、「西のさいたま新都心」と対比させて、浦和美園駅を中心とする地域を「東の副都心」と位置付けている。さいたま市が人口増加都市として発展しているのは、東部の大規模開発の影響も大きい。

新興住宅地では、多様な背景の人々が集中的に居住を開始して、異文化の衝突ともいえるべき生活上の課題が生まれやすい。急速に開発の進む当該地域に立地する本学としては、学校現場における課題を把握できるよう、教員と学生とが現場に出ていくという姿勢が必要である。まず、現場で何が起きているか、地域の教育課題は何か、ということに対し敏感にアンテナを張り、問題認識の力を養うことが、将来的な課題解決能力の形成に役立つはずである。

そのためには、近隣の小学校、幼稚園などの教育現場との関係を深めながら現代的課題を学び、課題解決能力を伴った教員養成を積極的に行っていくことが重要である。それは、「地域社会と連携した教育」を掲げる、こども学部の教育のあり方そのものというべきもの

である。

(3) 教員採用試験への対応と意義ある学生生活の両立

本学における教育がいかに特色あふれる内容であろうとも、それが社会に認知されるためには、教員採用試験の合格を通じて、学校現場に卒業生を送り出し、本学への評価を得ていくことが必要である。

教員採用試験へのサポートはどの大学も工夫を凝らし、全面支援に乗り出している。本学においても4年間を通じた支援計画を作成している。

少人数教育を生かした基礎学力の再確認からスタートし、大学での学びが、教師をめざす動機を沸き立たせるものとなって、課外での英語の学習や教員採用試験のためのセミナー受講に対して、自主的に臨む態度を形成しなくてはならない。採用試験だけを目指した学生生活では、就職がゴールになってしまう。

「混沌から私らしさを発見する」4年間のありようが、就職後の人生の基礎になる。本学部のこうした考え方を見失うことなく、学科での学修が展開されていけば、生涯の仕事として教員を選んだことを誇りとして歩む力を身に付けることができるであろう。そうした学科教育を強く望む。

むすびに

こども学部学校教育学科を設置した意義と、その接続性、特筆すべき学科教育の特色を紹介してきた。

少子化のもと、小学校教員の需要減少が予測されるなかで、なおも教員養成に乗り出したからには、新しい学科でなければできない取り組みを思い切って行う覚悟が必要である。近年、介護福祉士、保育士に続き、学校教師もまた、多忙を極める職業として敬遠される傾向が強まっている。そうしたなかで骨太の職業人をそれぞれの学部学科で養成していくことが本学の使命と言えよう。

振り返れば、本学が福祉科を設置した時期は、いわゆる「就職氷河期」で、高齢化の急速な進行を支える福祉業界は将来性ある成長産業であるとの期待感があつた。が、現実には、戦後半世紀の社会福祉は基礎構造改革の只中で混迷を深めていた。理念はノーマライゼーションによる在宅福祉、現実には施設福祉の推進という政策矛盾をかかえ、国際的な新自由主義改革による社会福祉分野の市場化の流れの下、規制緩和による社会福祉事業への多様な事業主体の参入が進んでいた。が、その人材需要と養成による供給が合致することは無かった。

しかも、そうした矛盾の狭間に置かれた介護福祉士の労働条件の劣悪さが報道されるや、一夜にしてブームは終わった。

それでも社会的要請の高い福祉・介護分野はもちろんのこと、不足が声高に叫ばれる保育士養成において、量だけでなく質の確保に対し本学として取り組む必要性は高い。

不確実な格差社会における義務教育、特に小学校教育はこどもの生涯への投資であり、未

来社会への投資である。新しい時代に対応できる教員養成に本腰を入れて臨もうとしている。

私学として受け継がなくてはならない伝統の本質を見極めつつ、常に「旬」であり続ける変革を重ねることによって伝統は真の「伝統」になる。「それをなくしたら、私が私でなくなる」それを誇りと呼び、見失うことなく変革し伝統を作っていくなくてはならない。

本質が歪められることには目を光らせ、しかし、「旬」であるためにどうしたらよいか、思考と試行を重ね、果敢に次なる夜明けまで創造的挑戦を続ける、その過程にある新学科設置の意義は大きい。

謝辞

新学科開設に際しては、久田有理事長を初めとして、理事の方々ばかりでなく、さいたま市の関係者、学外からの支援者を得て、さまざまな困難に立ち向かう勇気を与えていただいた。この場をお借りして心からお礼を申し上げます。

構想段階から4年、学科開設のために、誰よりも強くご支援下さり、ご病床から絶えず励ましとねぎらいの言葉をかけ続けて下さった、故牧野眞一前理事長の墓前に、本稿を以て無事に開学したことを心からの感謝と共に報告させていただき、今後、必ず成果を出す学科にしていくために、弛まぬ努力を続けていきたい。

参考文献

- 九里總一郎 『教育に愛の灯をともして』 朝日新聞社 1998年3月
- 渋谷治美 「教員養成改革の動き」(インタビュー) SYNAPSE VOL.46 ジアース教育新社 平成27年7月
- 渋谷治美 「教職課程コアカリキュラムと教師教育の質の向上について」(巻頭インタビュー) SYNAPSE VOL.58 ジダイ社 平成29年8月
- 大久保秀子 「浦和大学こども学部の教育理念と特色—地域社会と連携して総合的キャリア形成をめざす—」 浦和大学・浦和大学短期大学部「浦和論叢」第38号 2008年3月
- 大久保秀子 「家族支援の新たな展開に向けて」『Listening to Families 一家族の多様性へのアプローチ—』カナダの家族支援に学ぶ2012 浦和大学国際セミナー資料 浦和大学こども学部 2012年7月
- Dr. Mehrunnisa Ahmad Ali, "Encounters with Uncertainty: Nurturing the Creative Spirit" 「多様化する家族との出会い—創造的実践力を養う—」 カナダの家族支援に学ぶ2016 浦和大学国際セミナー資料 浦和大学こども学部 2016年7月
- 日本学術会議 健康・生活科学委員会 家政学分会「提言 生きる力の更なる充実を目指した家庭教育への提案—教員養成の立場から—」 日本学術会議 平成29年9月20日
- 日本学術会議 言語・文学委員会 文化の解返と言語分会「提言 ことばに対する能動的態度を育てる取り組み—初等中等教育における英語教育の発展のために—」 日本学術会議 平成28年11月4日
- 日本学術会議 法学委員会 社会と教育におけるLGBTIの権利保障分会「提言 性的マイノリティの権利保障をめざして—婚姻・教育・労働を中心に—」 日本学術会議 平成29年9月29日
- さいたま市 『さいたま希望のまちプラン 総合振興計画 平成23年度改訂版』 さいたま市政策局政

策企画部企画調整課 平成24年3月

さいたま市 『2020さいたま希望のまちプラン 総合振興計画（基本構想・後期基本計画）』 さいたま
市政策局政策企画部企画調整課 平成26年6月

Summary

The Future Possibilities for New Department,
“The Department of School Education” at Urawa University
— Education for elementary school teachers —

Hideko Okubo

In April 2017, the new department named “Department of School Education” was founded within the Faculty of Child Studies of Urawa University. This department will develop specialized teachers for elementary school. It’s the second department within the Faculty which was first established in 2007. (To avoid confusion, it should be noted that within the “Faculty of Child Studies”, there are two separate departments: “Department of Child Studies” and “Department of School Education”.)

The two departments in this Faculty share strong points in common. In these departments, we regard as crucial the grasp of the individuality of children.

While the ultimate goal is for elementary students to realize and understand their own unique individuality, this must first happen with students who are preparing to become teachers. It can be difficult for children to develop a sense of self-awareness, learning to think for themselves, and likewise it can be difficult for teachers to see each student as unique individual. This applies not only to teachers but also for child care workers, and kindergarten teachers.

Although of course the practical skills of teaching is important and has an established curriculum for developing these skills, a deeper ability for understanding children’s individualities is important as well. This should be emphasized alongside with the practical skills, supplemented with a holistic approach including fields as music, art, gardening, child and family psychology, for example.

Our new department is putting this idea into practice. This is a new direction for the training and education of teachers.

Keywords Department of School Education, teacher training and education,
understanding unique individualities

(2017年11月16日受領)